

無意識の線引きをなくすために

私たちは「優しさ」と「思いやり」を大切にすべきもとして学んできた。だが、それが「特別」な行動とされたとき、そこには見えない線引きや差別が生まれてしまうのではないか。そんなことを、私はある出来事を通して感じた。

小学生の時、私のクラスには特別支援学級に籍を置きながら、普通学級で一緒に学んでいた子がいた。彼女は授業のスピードについていくのが難しく、あまり話すこともなかった。でも私はただ「困ってそうだから」という理由で自然と彼女に手を差し伸べていた。教科書のページを開いてあげたり、体育のときにポジションを教えたり。特別な意識からではなく、当たり前のようにしていた行動だった。しかし、学年末に渡された通知表の一言が、私の胸に小さな違和感を残した。

「特別支援学級の子を助ける姿に心が熱くなりました。」

担任の先生のこの言葉を読んだとき、私は戸惑った。先生は私の行動を評価し、善意で書いてくれたのだとわかった。それでも、その言葉を素直に受けとめられなかった。なぜその行動が「すごい」とされるのだろうか。もし相手が「普通」と言われる子だったら、同じ行動をしても通知表に書かれただろうか。きっと書かれなかったと思う。「特別支援学級の子を助けた」からこそ、評価されたのではないか。そこに無意識の線引きが存在しているような気がした。私にとって、目の前で困っている人に手を差し伸べることは、特別なことではなかった。それが「特別」「偉い」と言われた時、自分でも気づかないうちに「あの子は普通ではないから助けることが特別なんだ」と心の中に線を引いてしまいそうになる。その感覚に私は違和感を抱いたのだ。

後になって、私は「障害」という言葉について考えるようになった。調べると、「障」は妨げ「害」はわざわいという意味だと知った。だが、障害を持つ人が本当に「害」や「妨げ」になるのだろうか。私はそうは思わない。むしろ本当の「障害」は、違いを「特別」や「すごい」として捉えてしまう社会の側にあるのではないか。ある基準から外れた人を「障害者」と呼び、配慮されるべき存在として特別扱いすること、そしてその行動を過剰に賞賛することが見えない差別につながってしまっているのではないだろうか。もちろん、配慮や支援は必要だ。だが「助ける人＝すごい人」「助けられる人＝弱い人」という構図のままでは、助ける行動はいつまでも「特別な行い」とされ、助けられる側は常に「特別な存在」として扱われ続けてしまう。それは本当の意味で「共に生きる社会」とは言えない。本当に目指すべき社会は、誰かを助けたという「結果」よりも、助けること

が自然な行動として受け入れられる「空気」を持った社会ではないだろうか。例えば、電車でお年寄に席を譲る時、それを褒められるよりも、誰もが当たり前に行う世界。そんな空気の中で、人と人とが支え合って生きていけたらどれほどあたたかいだろう。

私たちは皆、少しずつ違いを持っている。障害だけでなく、性格、感じ方、生まれ育った環境、好きなこと、得意なこと、人はみな異なる要素を抱えている。それなのに、目に見える違いだけが「特別」とされ、それに対する行動が「素晴らしい」と評価されるのはどこか不自然な気がする。「普通」とはなんだろう。誰がその基準を決めているのだろうか。もし「普通」から外れる人に対してだけ優しさを「特別な行い」として評価するのなら、その優しさは、誰かを見下す構造の上に成り立ってしまう。優しさとは、本来、人に差をつけるものではなく、差をなくすためにあるべきではないか。私はこれからも、どんな人とも同じ目線で接していきたい。見た目や所属、立場にとらわれず、目の前の人の気持ちを想像し、必要なときに自然と手を差し伸べられる人でありたい。そして、それが「すごい」ことではなく、当然のこととして社会に根づいてほしい。助け合いが評価されることで、優しさに線引きされてしまう世界ではなく、どんな人にも自然に優しくできることが「普通」とされる世界。そうした空気を私たち一人一人がつくっていったら「障害」という言葉が必要のない社会に近づくのではないだろうか。誰かを助ける行動は小さな一歩かもしれない。けれど、その積み重ねが社会の見方を変え、やがて本当の意味で対等で、優しさにあふれた世界へとつながっていく。

私があの時抱いた違和感は小さな芽だったと思う。でもその芽を大切に育てていけば、見える世界はきっと変わる。私は、これからもその芽を忘れず、日々の行動に込めていきたい。それが、今の私にできる、小さな人権の守り方だと信じている。